九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

「いはせの森の呼子鳥」考 ： 『源氏物語』早蕨巻の引歌

川原田，祐子
九州大学大学院博士後期課程

https://doi.org/10.15017/9356

出版情報：語文研究. 91, pp.1-12, 2001-06-02. 九州大学国語国文学会
バージョン：
権利関係：

「いはせの森の呼子鳥」考

――『源氏物語』早蕨巻の引歌――

川原田　祐子

はじめに

『源氏物語』の世界を構築するために不可欠な役割を果たすものとして引歌がある。それを「本歌の表現や内容を前提として、文脈に暗示的に装飾や意味を付加し、美的で含蓄に富んだ修辞効果をもたらして、豊かな作品世界を形成する技法」(注1)と規定するならば、本文と引歌の関係を明らかにすることは『源氏物語』を読むために欠かせない作業といえる。

『源氏物語』を彩る引歌表現は、古注以来たゆまず研究の対象となってきた。そしてその解読が進むにつれ、その場面の解釈がより具体的イメージを持てるようになった。

引歌の解明には、大きく分けて次の二種類があろう。これまで引歌と思われていなかった箇所を探り当てるものと、引歌が指摘されてはいたが、出典未詳であったり引歌そのものがふさわしくなく別の歌の探究が必要なものである。

本稿で取り上げる早蕨巻の引歌表現は、後者に属して解読を待っていたものの一つである。

一

早蕨巻には、「いはせの森の呼子鳥」という古来不審視される箇所がある。それは次のような場面の中に登場する。

薫は大君没後匂宮と中君の処遇を話し合う。大君から「こと人とな思ひわきそ」と中君を託されたことを打ち明け、実質的な後見人という自分の立場の正当性を明らかにするこの場面で、薫はある一点を匂宮に語らなかった。

それは、薫と中君が匂宮に隠さなければならない総角巻での出来事であった。大君を求めて姉妹のもとに忍んだ薫は、大君の逃げ出した寝所に中君とともに置き去りにされ、そこで二人で夜を明かしたのである。この時目のあたりにした中

君の麗姿は長く薫の記憶に残り、大君亡き後そのよすがとして薫の邪念をかき立て、中君を苦しめることとなる。浮舟が宇治の物語に呼び込まれるのは、この薫の執着をかわすための中君の苦肉の策であり、浮舟の物語の遠い発端になったという意味からも、総角巻の夜の出来事はゆるがせにできない意味を持つ。

早蕨巻で薫が語らなかったのは、この夜の出来事であった。事柄の性質から夫たる匂宮に語ることができないのは自明のことであるが、それを物語は次のように表現する。

…かの、こと人とな思ひわきそと譲り給し心をきてをも、すこしは語り聞こえたまへど、いはせの森の呼子鳥めいたりし夜のことは残したりけり。心のうちには、かく慰めがたき形見にも、げにさてこそ、かやうにもあつかひきこゆべかりけれと、くやしきことやう〳〵まさりゆけど…

（早蕨　五巻八頁／一六八一④）[注2]

（傍線は引用者による。以下同）

薫が言い残したこと、それが中君とひたおもてに夜を明かしたことであるのは疑う余地がないが、それを指して「いはせの森の呼子鳥」というのは何故なのだろう。

ここには然るべき引歌があるべきであろう。『源氏釈』以来、引歌が指摘されるものの、その解釈は明確ではなく、現在に至ってもその不審は残されている。いわんとするところは明確でありながら、何故この修辞が用いられたのか、その必然の意味は今もって明らかではない。

「いはせの森の呼子鳥」[注3]について、「いはせ」も「呼子鳥」も『源氏物語』中この一例しか例のない語である。古注はそれを次のように説明する。

『源氏釈』（源氏或抄物）[注4]

いはせの森のよふことりめきたりといふ所は
恋しくはきてもみよかし人すてにいはせの杜のよふことり哉といふふる事の心也

『奥入』（定家自筆本）[注5]

こひしくはきても見よかし人つてにいはせのもりのよふことり哉

『河海抄』[注6]

恋しくはきてもみよかし人つてにいはせの森のよふこ鳥哉　伊行尺奥入
神なひのいはせの森のよふこ鳥いたくなゝきそ我恋まさる　万鏡王女
案之此両哥猶いまの心にかなはさる歟可勘
薫大将にあね君の中君をゆつられし事をは兵部卿宮に語

たてまつれともまさしく会合（の）事をのこしたりといふ心也　其由の本哥さためてあるへき歟猶可勘

『花鳥余情』(注7)

岩せのもりのよふこ鳥めいたりしよの事はのこしたりけり

いはせのもりのよふこ鳥の事しかとかなひたる古歌は侍らねども心をとりていはゝ恋しくはきてもみよかしの哥大かたはさうゐなきにや人つてにいはせのもりのよふこ鳥かもは人つてならぬといへる心也又いはせのもりをいはたのもりとかける源氏の一本ありと云々

現行注にはこれらを受けて次のようにある。

『新日本古典文学大系』（五巻八頁）

八　心ならずも中君と一夜を明かした夜のことをさす。→四総角四〇五頁。ただし「いはせの森の呼子鳥」の意味するところ、古来「恋しくは来てもみよかし人つてにいはせの森のよぶこ鳥かな」、「神なびのいはせの森のよぶこ鳥いたくな鳴きそ我が恋まさる」を引歌として挙げるが、判然としない。

『日本古典文学大系』（五・一五）

二三　かつて岩瀬の森の呼子鳥のようであった（大君と思い違って中君の許に仮寝した）一夜の事は。

補注一三（五・四三八）…即ち、人を仲介してその人から言わせず、仮寝の床に、直接語った事を言う意味のようである。宗祇が、一条兼良に質問した時、「人づてならでと言ふ心に、呼子鳥と言ふなり」と答えた由は、万水一露に見える。それらに従うべきであろうか。…

『日本古典文学全集』（五・三四一）

二〇→総角二四三ページ。『源氏釈』以来、諸注は「恋しくは来てもみよかし人づてにいはせの森の呼子鳥かも」（出典未詳）を掲げる。「いはせの森」は、奈良県生駒郡斑鳩町にある森で、ここでは「（人づてに）言はせ」をかける。（『新全集』も同じ）

『新潮日本古典集成』（七・一三〇）

六　中の君に直接逢ったあの一夜のことは（総角三九頁）。古注に「恋しくは来ても見よかし人づてに磐瀬の森の呼子鳥かな」を挙げるが、しっくりしない。この歌『玄々集』には儒者孝宣とする。紫式部とほぼ同時代の人である。「磐瀬」に「言はせ」を掛ける。磐瀬の森は、歌枕。大和、生駒郡斑鳩町車瀬。

諸注の解釈は、引歌「恋しくは来てもみよかし人つてにいはせの森のよぶこ鳥かな」「神なびのいはせの森のよぶこ鳥いたくな鳴きそ我が恋まさる」に沿っており、それに不審を示す示さないの違いである。引歌が破綻しない解釈として、『花鳥余情』説に従い、「恋しくは」歌の「人つてにいはせの森のよぶこ鳥」によって「人づてでなく」中君に逢ったと理解する。

これに対し、玉上琢彌氏は『源氏物語評釈』の中でその説を採りながらも、「いはせの森」と「呼子鳥」が対になっている歌に「人づてならで」の意味が出てくるのはいつ頃かという疑問を呈している。

『源氏物語評釈』（十一巻三八頁）

「いはせの森」は大和国生駒郡竜田村にある竜田川東岸の森で、『万葉集』にも多く歌がみえる。巻八に鏡王女の歌として「神奈備の岩瀬の森の呼子鳥いたくな鳴きそわが恋まさる」とあって、呼子鳥と対になって出ているが、この時代の歌には、「人づてならで」の意はない。そのような意味が出るのはいつの頃であろうか。

「いはせ」と「呼子鳥」の取り合わせがはっきりと「人づてならで」の意になる歌は、管見の限りでは、「人づて」を詠み込んだこの『玄玄集』歌のみである。

この歌の眼目は「私が恋しいのならば、人づてにそう言うのではなく、直接会いに来て言ってほしい」というところであり、その「人づてにいわせる」に「いはせの森」を利かせたのが修辞としての面白さである。その「いわせる」に注意を払わず、「人づて」を更に捻って「人づてならで」と解するというのは、引歌のあり方として果たして適当なのであろうか。また、大系注はそれに触れるが、そもそも「人を仲介してその人から言わせず、仮寝の床に、直接語った」（傍点は引用者）ということが、殊更この場面で取り上げられる理由があるだろうか。確かに間違いとはいえないが、この箇所の性質を表現するのにこの古歌のみを挙げるというのは、いかにも役不足のように思われる。現行諸注の不審もそれ故のものであろう。

やはり、この箇所は古注以来の指摘の枠を越えた、別の方向からの究明が必要であるように思われる。しかし、そこで鍵になるのは、やはり「いはせ」そして「呼子鳥」であろう。この二語を含みつつ、『河海抄』が「会合」という、早蕨巻の当該箇所が要請する意味内容――男が女に忍ぶ――を持つ歌はあるのであろうか。

論者はその候補として、『元良親王集』の歌を挙げようと思う。

二

元良親王は陽成院一宮、いみじき色好みで、『百人一首』にも採られた『後撰和歌集』の次の歌が有名である。

事出で来て後に、京極御息所につかはしける　元良親王

わびぬればいまはたおなじ難波なる身をつくしてもあはんとぞ思ふ　（恋五・九六一番）

寛平二（八九〇）～天慶六（九四三）。三品兵部卿。母は藤原遠長女。家集の序に「陽成院の一宮もとよしのみこ、いみじきいろこのみにおはしましければ、よにある女のよしときこゆるには、あふにも、あはぬにも、文やり歌よみつつやりたまふ」とあり、また『栄花物語』巻第十「ひかげのかづら」にも「いみじうすきをかしうおはしまさひて」[注8]と紹介されるなど、その好色ぶりは世に響き、『河海抄』では光源氏の準拠の一つとしてその名が挙がる。

『元良親王集』には、親王と数々の女性との交渉がその歌のやり取りによって描かれる。

その中で今回取り上げる歌は、家集中最も長大な歌群である「いはやきみ」との贈答の中にある。

びはの左大臣殿に、いはやきみとてわらはにてさぶらひけるを、をとこありともしり給はで御文つかはしければ

おほぞらにしめゆふよりもはかなきはつれなきひとをたのむなりけり

をんな

いはせやまよのひとこゑによぶこどりよばふときけばみみぞなれぬる　（『元良親王集』一二・一三番）[注9][注10]

この一二・一三番歌は、一大歌群をなす一二～二七番歌の冒頭に位置する。

注目するのは一三番歌だが、本稿が問題にする「いはせ」と「呼子鳥」の二点のうち、「いはせ」については後述する。

さて、一三番「をんな」（「いはやきみ」）の歌は、言い寄る元良親王に、その評判の好色ぶりを材に切り返す。歌の解釈はこうである。[注11]

わたくしは、「はい」とは申しません、磐瀬山です。呼子鳥のようなあなたさまは、夜ちょっと一声声をかけては、呼びつづけ、たくさんの女人（おひと）たちに求愛なさると、世の評判にうかがっていますので、磐瀬山が呼子鳥を聞きなれているように、別段、事新しくも思いませんから。

親王の懸想を「よぶこどり」の「よばふ」に掛け、実のない誘いには乗らないと「いはやきみ」は答える。歌の前面に出るのは、「よぶこどり」が「呼ばふ」という動作であるが、そこに「婚ふ」、求愛するの意が込められるのは言うまでもなかろう。一三番歌は、恋の駆け引きで親王を軽くいなす歌であるが、そうした詠歌時の状況はさておき、表現そのものに注目すれば、「よばふ」がこの歌の眼目になってこよう。そして、総角巻において薫は文字通り姉妹のもとへ「よば」ったのである。

先に書いたとおり、「いはせの森」「呼子鳥」は、『源氏物語』において早蕨巻の当該箇所にしか出てこない語である。ために、物語中の他出例を吟味することでその意味を絞るという方法は使えない。しかしながら、現行諸注が指摘するように、それの指す具体的状況は明らかであるため、逆に類似した状況・場面を物語から探すことは可能である。

すなわち、男君が女君のもとへ忍びながら、目当ての君を逃し、不本意な相手と一夜を共にするという話は、『源氏物語』の読者であるならば、夙に既に体験していよう。それは、物語始発から間もない空蟬巻、光源氏が初めて体験した女君からの拒絶、空蟬との別れである。光源氏はその場の成り行きで軒端荻と契りながら、空蟬の残した衣を形見にかの女を偲ぶ。読者は総角巻のこの場面を読んだとき、巻を隔てたこの話を思い出したであろう。

しかし、空蟬巻と総角巻は単に全く同じパターンの繰り返しではない。寝所に忍んだ後、光源氏は軒端荻とその場を取り繕うように契ってしまうが、薫は大君がそう望んでいたにもかかわらず――というかそれ故に――中君とは何事もなく過ごす。この何事もなかった夜が薫と中君の新たな苦しみを喚ぶ契機となり、それが宇治十帖後半部の展開につながることは前述したとおりである。作者は、単に繰り返しを避けるためにアレンジを加えたというのみならず、新たな物語を呼び込む端緒をそこに用意したのである。

ただ、話を戻すと、二者に共通するのは親族の女性と寝ている女君のもとへ男君が忍ぶ（が逃し、不本意な方と取り残される）という点である。

その後の展開の違いで、二者の性質の差は歴然とするが、ここで注目すべきなのはその共通部分、つまり男君が女君へ忍ぶというその根幹の部分であろう。そうすると、早蕨巻の「いはせの森の呼子鳥」に要請されるのも、男が女性のもとを訪なう・忍ぶという内容と考えるのが自然である。

さて、そうなると、「よばふ」を前面に出したさきの『元良親王集』の歌は、薫が宇治の姉妹のもとへ忍んだことを象徴する歌として考えてもよいのではなかろうか。

しかし、この表現の面だけで『元良親王集』歌を早蕨巻と関わらせて云々するのはいささか根拠として弱いかもしれない。が、該歌を含む『元良親王集』の一連の歌群に目を転じ

ると『源氏物語』との奇妙な符合に気づくのである。

宮おはしましていでよとのたまへば、女
いささめにわが身をうみとうきなみのたちいでてやまむ
ことはをしきを
返し給ふとてもねらるまじとのたまひければ、又、女
ふさむからねざめをしてはおき返りまたもこじとぞきみ
はちかはん
女のもたる物をとりておはしにければ、つとめて、女
人こふるよるの衣にあらずともさればかへして我にみせ
なん
かくてこの女こと人にあひて宮のうらみたまけれは
よしのがはよしおもへかしたきつせのはやくいひせばか
からましやは　（一六～一九番）

一八番歌の詞書「女のもたる物をとりておはしければ」、親王が「いはやきみ」に拒まれて、せめてもと衣を持ち帰るという状況は、空蟬巻の最後の場面を彷彿とさせる。

もっとも、作品成立の前後関係でいえば、現伝存形態の『元良親王集』は頼通の時代の成立かといわれる。[注12] 原形態は「雑纂ふう」[注13]で現伝存形態とは大きく異なるものであったらしく、それが『後撰和歌集』『拾遺和歌集』また『大和物語』などの依拠資料となったというのが現在の見方である。

したがって、今残る『元良親王集』から『源氏物語』との表現的に相通じる点を見ようとすると、たとえその表現に『源氏物語』と関わる措辞があったとしても、それは『源氏物語』に由来するものと考えるのが自然であろう。そういう意味で、現『元良親王集』にある表現が『源氏物語』の直接的源泉となったとはいえない。

しかし、『源氏物語』が『元良親王集』から本歌・引歌として用いられた歌が複数あるのも事実である。[注14]『元良親王集』現伝存形態本と『源氏物語』の前後関係はともかく、この両者の間には一つの歌にとどまらない関わりが存するといってよいだろう。この中に、「いはやきみ」の一三番歌を置いてみると、「いはせ」「よぶこどり」を介して、女君を「よばふ」男の姿が浮かび上がる。この歌も『源氏物語』に残る『元良親王集』の陰の一つということができるのではなかろうか。

三

さて、残る問題として「いはせやま」と「いはせの森」がある。『万葉集』以来「呼子鳥」との取り合わせで詠まれた歌のうち、平安中期までに詠まれたのは次のようなものである。

鏡王女歌一首

神奈備乃　伊波瀬乃社之　喚子鳥　痛莫鳴　吾恋益

（かむなびの　いはせのもりの　よぶこどり　いたくな

なきそ　あがこひまさる）

（『万葉集』巻第八春雑歌一四二三（一四一九）番）

よぶこどり　　王子

神なびのいはせのもりのよぶこどりいたくななきそわが

こひまさる

（『古今和歌六帖』四四六七番）

孝宣一首儒者

為義朝臣人づてによばせければ

こひしくはきてもみよかし人伝にいはせのもりのよぶこ

どりかな

（『玄玄集』九三番）

をんな

いはせやまよのひとこゑによぶこどりよばふときけばみ

みぞなれぬる

（『元良親王集』一三番）

はるごろ、まちどほにて、女

きみをしていはせのもりはよぶこどりつひになきぬるよ

ぶこどりかな

（『一条摂政御集』一三一番）

ある所にある女のさとにいづることもたはやすから

ず、いひつくものもくるしげなれば、こと人をかた

らはむなどおもひて、とかういひやる

よぶこ鳥いはせのもりにすみわびぬなほあふさかをこえ

やしなまし

（『能因法師集』一七番）

数ならぬ　道芝とのみ　嘆きつつ…あはれ忘れぬ　名残

には　日数ばかりを　数ふとて　なき渡るめる　呼子鳥

ほのかに君が　嘆くなる　声ばかりにて　山城の　とは

に磐瀬の　森過ぎて　我ばかりのみ　住の江の　まつゆ

き方も　波かくる…

（『栄花物語』巻第九いはかげ）

『万葉集』と『古今和歌六帖』は同一の歌で該歌の引歌でもあるが、一覧して分かるように、「いはせの森」と「いはせ（の）やま」のうち、「呼子鳥」と取り合わせて詠まれるのは、『元良親王集』を除いてすべて「いはせの森」ということである。

では、「いはせ」の用例では「森」と「やま」のどちらにつくのが多いか。ここでも、「いはせの森」が圧倒的に多く、時代的に合う「いはせ（の）やま」という例は『元良親王集』を入れて次の歌を見つけるにとどまった。

しのびたる人につかはしける　　よみ人も（しらず）

いはせ山谷のした水うちしのび人のみぬまは流れてぞふる

（『後撰和歌集』巻第九恋一　五五七番）

（他出）

・『伊勢集』一五〇番

人の

いはせやまたにのしたみづうちしのび人のみぬまはながれてぞふる

（かへし

たきつせのはやからぬをぞうらみつるみつともおとをきかむとおもへば）

・『同』四一〇番

（伊づに人のながされたるに…三七六詞書）

いはせやまたにのしたみづうちしのび人のこぬまはながれてぞゆく

・『古今和歌六帖』第三　一四六〇番

水　　伊勢

いはせ山谷の下水うちしのび人もみぬ間にながれてぞふる

・『新勅撰和歌集』異本歌　一三七七番（題しらず）（よみ人しらず）

いはせ山谷のした水より忍び人のみぬればながれてぞふる

山　　きせんほふし

われをのみいはせの山にこるなげきくやしともえぬ日ぞなかりける

（『古今和歌六帖』第二　九〇八番）

「いはせ（の）やま」は伊勢など平安前期の歌にわずかに見える程度である。これをどう解釈するべきか。少なくとも歌語としては、「呼子鳥」があってもなくても、「いはせの森」が平安中期には一般的であったとはいえる。

早蕨巻の異同では「いはせ（の）やま」の異文はないため、ここの本文が最初から「いはせの森」であった可能性は高い。[注15] そうすると、作者が『元良親王集』の歌を知っていた場合、それをもとの歌通りの「いはせやま」ではなく、より口馴れた表現「いはせの森」の方に修正したと考えるのはどうであろうか。

前代に少し流行った表現ではなく、それを当代流に直して物語の文言に組み込んだのではないか、というのがこの点に関しての私解である。

四

早蕨巻の「いはせの森の呼子鳥」はこれという引歌が未詳であった。しかし、私見によれば、『元良親王集』の歌こそが、そこに挙がるべき歌のように思われる。これに対し、『源氏釈』以来伝わる二首の歌は、いずれも引歌と確定するには決め手に欠ける。

その一首、『万葉集』鏡王女の「神なびのいはせの森のよぶこ鳥いたくな鳴きそ我が恋まさる」は、「いはせの森の呼子鳥」が一致する。例えば賀茂真淵はこの歌に賛意を示し「中君を大君の我にゆるせし事をいたくはしく宮に語らんには我恋の増りて色に出へければいひのこしたる」という。(注16)

たしかに、歌のいわんとするところ、つまり「我が恋まさる」は薫の心情として外れるわけではないが、それは今（思い返して匂宮に話す段階）になってみると、という結果での心情である。つまり「いはせの森の呼子鳥めいたりし夜」を思い出しての現在の心情なのであって、「いはせの森の呼子鳥」そのものにはなりえない。また、「我が恋まさる」のでその夜のことを「残したりけり」伏せておいたというのは、理由としていささかずれてこよう。恋がまさるから言えないのではなく、知られてはいけない事実があるので言えないのである。

もう一つの歌、『玄玄集』が儒者孝宣詠とする「恋しくは来てもみよかし人つてにいはせの森のよぶこ鳥かな」は、「人伝に言わないで」が直接中君と逢ったことを指す、と取ろうと思えば取れる。しかし先に挙げた『玄玄集』の詞書を見ると、この解釈も本文に無理に近づけた感がある。詞書によると孝宣の歌は「為義朝臣人づてによばせければ」に対する歌である。ここでの眼目は「人伝」に「いふ」「よぶ」という行為そのものではなかろうか。その行為に対して、人伝でなく自らが来てほしいという希望を返している。結果的には直接会ってほしいという思いにつながるが、歌として重点が置かれるのは、むしろそれを導いた「人伝」という行為であろう。そう考えればこそ詞書と歌両方にある「人づて」という語が活きる。

早蕨巻にこの歌をあてはめようとすると、直接会ったという結果に焦点が絞られ（ただし、本歌では会ってほしいにとどまるが）、歌の重点とずれたところで引歌としているといわざるをえない。

また、『源氏釈』の一本前田家本(注17)では問題の「人伝に」が「ひとすちに」と揺れ、こうなると引歌からはますます遠くなる。

これらのことから、「恋しくは」も引歌とするにはやはり無理がある。(注18)

あくまで引歌なのだから、厳密に本歌の歌意に従わねばならないわけではないと考えることも可能だろう。しかし、た

とえば物語本文には、当該箇所のすぐ後に次の描写がある。

かしこにも、よき若人、童など求めて、人〳〵は心ゆき顔にいそぎ思ひたれど、いまはとてこの伏見を荒らしはてむもいみじく心ぼそければ、嘆かれ給こと尽きせぬを、さりとても又、せめて心ごはく、絶え籠りてもたけかるまじく…

（早蕨　五・九）

傍線部は、『古今和歌集』巻第一八雑下九八一（題しらず）（よみ人しらず）「いざここにわが世はへなむ菅原や伏見の里のあれまくもをし」を本歌とする。京移転の迫る中君の心情を的確に表した引歌表現であろう。近接した箇所に本歌の歌意を素直に取り入れる引歌表現があることを考えると、当該箇所のみ古注の右記二首を本文に引きつけて引歌とせねばならない必要はないように思われる。

確かに、『元良親王集』の「いはやきみ」の歌が引歌として正鵠を射ているというには、初句「いはせやま」と物語本文「いはせの森」など、問題を抱えていよう。しかし、そこに詠み込まれた「よばふ」という行為は、総角巻で実質が伴わなかったとはいえ、薫と中君の間に起こった出来事と一致する。それこそが、匂宮に語られず薫の中に残された部分なのである。『元良親王集』の「よぶこどり」の歌は、薫と中君の秘密を端的に暗示しうるという意味で、「神なびの」「恋しくは」の二首よりも、より引歌としてふさわしい要素を持つのではないだろうか。

おわりに

薫と中君は、二人で夜明かししたことを匂宮に最後まで語らなかった。それは、もし事が露見したとき、二人を待ち受ける世間の目がどんなものであるかを熟知していたためである。

すなわち、夕霧巻の落葉宮に先例を見るごとく、本人の意思とは裏腹に周囲がその状況を決めてかかるという事態に陥る危険性が強かったことは想像に難くない。実際には世間でいう逢瀬には程遠いものであったにせよ、そうした出来事があったという事実そのものが二人にとって隠蔽を必要としたのである。男君が女君と二人で夜を過ごす、そうした行為は「よばふ」といわれても不思議のない行為であろう。

薫が敢えて語らなかった夜のことを、物語は「（いはせの森の呼子鳥）めいたりし夜」と表現し、総角巻を念頭に置いて、実際逢ったわけではないがまるでそんな風な夜であったと語る。

「よばふ」を詠み込む『元良親王集』の歌が注目される次第である。

注

1 「レトリックとしての歌ことば――薫の大君への求婚の形象」『源氏物語の歌ことば表現』二七七頁（小町谷照彦著　東京大学出版会　昭和五九年八月）。

2 本文は『新日本古典文学大系　源氏物語』第五巻（岩波書店　平成九年三月）による。尚、「／」以下の数字は大成番号。

3 「いはせの森」
『和歌童蒙抄』（『日本歌学大系』別巻一・一六七頁）
岩瀬の森は大和にあり。又津国やしなのにもあり。
「呼子鳥」
『能因歌枕』（『日本歌学大系』巻一・七五頁）

4 よぶこどりとは、いはせのもりにかけて読べし。
『源氏物語と和歌　研究と資料――古代文学論叢第四輯――』（紫式部学会編　武蔵野書院　昭和四九年四月）資料編所収。

5 『源氏物語大成』資料編所収。

6 『紫明抄　河海抄』（玉上琢彌編　角川書店　昭和四三年六月）。

7 『松永本花鳥餘情』（『源氏物語古注集成』第一巻　伊井春樹編おうふう　昭和五三年四月）。
ただし、『花鳥余情』にいう「いはたのもり」を持つ本文は『源氏物語大成』校異篇にはない。

8 本文は『新編日本古典文学全集　栄花物語』第一巻（小学館平成七年八月）による。

9 本文は『新編国歌大観』第三巻による（宮内庁書陵部本）。以下、和歌の引用は同書による。

10 ちなみに『今昔物語集』巻第二四「陽成院之御子元良親王、読和歌語第五四」は一二歌・親王、一三歌・いはやなぎ（岩楊）とする。

11 『元良親王集注釈』一六頁（木船重昭著　大学堂書店　昭和五九年六月）。

12 前掲注11　一五四頁。

13 前掲注11　一五一頁。

14 前掲注11　一五一～一五二頁。

15 ただし青表紙横山本は「いはせのよふことり」。また前掲注7参照。

16 『源氏物語新釈』（『賀茂真淵全集』第九巻四一六頁）。

17 前掲注5所収。
恋しくはきてもみよかしひとすちにいはせのもりのよふこ鳥かな

18 『異本紫明抄』（宮内庁書陵部蔵　『ノートルダム清心女子大学古典叢書　紫明抄』五）『源註拾遺』（『契沖全集』第九巻）『源氏物語新釈』（前掲注16）は、『古今和歌六帖』一〇五五の次の歌を挙げる。「きくからにもゆるおもひは（『異本紫明抄』「くゆるなけきや」）山城のいはたのもりになくよぶこどり」。引歌として早蕨巻で暗示されるべき内容――形だけとはいえ男女が密かに逢った――からはこれもずれると考えられるため、今回は考察の対象としなかった。

（かわはらだ　ゆうこ・本学大学院博士後期課程）